松山幸生先生講述・第３回

語られた、聴いた「大いなる救い」

第２章①節から④節　　大いなる救い

①だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。
そうでないと、押し流されてしまいます。
②もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば、
③まして私たちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によって私たちに確かなものとして示され、
④更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。

それでは、今日はヘブライ人への手紙の2章の①節から④節を中心に、ご一緒に学びの時を持ちたいと思います。
先ず文章そのもの、言葉の構造としては、1章が①節から④節まで「神は御子によって語られた」という形で序説が述べられており、それに丁度対応する形で2章もまた①節から④節までのところで「大いなる救い」というタイトルにて、1章の①節から④節の部分を受けての注意勧告が展開されています。特に今日のところでは、この「大いなる救い」という見出しに着眼しながら、一つ一つの言葉を味わってゆきたいと思います。

前回の1章では「**神は―この終わりの時代には、御子によって私たちに語られました**」という言葉で序論が述べられましたが、この「語られた」というのはギリシャ語では**ラレオー**という言葉です。このラレオーは、ただ単に「語る」という意味だけではなく、「吸収されていく、受けとめられていく」あるいは「聴かれることを前提として語る」という意味を含む言葉なのです。ですから、「語られた」と同時に、「聴かれた、受けとめられた」とならないと、真の意味が立ってこない言葉であるのです。

（語られ、聴かれた。応答せねばならない。）

つまり、神が語られたことが、既に、現実の中で具現化された、あるいは、受けとめられて応答があった、というように捉えていく、そういう内容を持った言葉なのです。です**から**、私たちも、そのように、神の御言を注意深く受けとめていこうではないか、神の御言を真摯にお聴きし、誠実にお応えしていこうではないか、というお勧めが、ここでは重要なポイントにな**ってい**るのです。

「受け止める」を「受けとめる」としていますのは、鷲田さんの「折々の歌」の中の「受けて、それを止めたり留めたりするだけでなく、それを豊かに用い、新たな展開、開花をなしてゆくという意味で『受けとめる』と記しています」というお説に、共鳴したからです。

① 節。**だから私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。そうでないと、押し流されてしまいます。**

「**だから、私たちは聞いたことにいっそう注意を払わねばなりません。**」という①節の冒頭は、神が語られた、既に神の御言はあなた方の中に受けとめられている、ということが前提となっています。ですから、ただ空しく、神の御言が説き明かされるのを待つのではなく、語られた御言に対して自身が注意深く、これを「聴いていかなければ」、「受けとめていかなければ」、「応答していかなければ」というように、前向きな姿勢で読んでいくのがよいと思います。（今日のところは少し短い文ですから、各節に書かれている言葉に注意しながら、各節で語られている箇所をじっくり味わってみようと思います。）
続けて「**そうでないと、押し流されてしまいます**」というように書かれています。この「押し流される」という言葉、これは**パラレッオー**という言葉ですが、この言葉は実は、唯自然に「流されて行く」という意味でなく、航海で使われる特別な用語なのです。
具体的には「船を操舵していく時に使われる言葉」で、例えば舵を、寄るべき港を目的地にきちんと合わせて操っていても、強い流れがあると、その流れによって次第々々にその方角から外れていってしまう。自分ではその目的地に向かって進んでいると信じていながら、外的な条件により目的地から外れて行ってしまう。そして遂には、その目標の港に着くことが適わなくなってしまう、というような場合に「押し流される；パラレッオー」は使われるのです。
従って「押し流されてしまうとは、神様、神様と口で唱え、頭で念じてはいても、現実の生活の中では、徐々に真実への信念が喪失されてゆき、終いに、神様から他のものに関心が移ってしまうこととなる。だから、目を覚ましていなさいとの注意勧告があるのです。

私たちは、神を礼拝する、神の御言に耳を傾ける、神によって生かされている、という言葉をしばしば用います。そして現実的に、イエスがお生まれになった時代、あるいは初代教会の時代にも、ユダヤ人たちは「私たちは神によって選ばれた神の民である」ということを言い続けてきたわけです。
確かに彼らは神によって選ばれた。しかも、それは決定的に、神の救いに与ることのできる選びであった。しかし、そのことだけを彼らが金科玉条のように受けとめて、自分たちが今確実にその方向に向かっているかどうか、現実の歴史の中で確認せずにい続けると、目的地に向かっているとばかり思い込んで、とんでもないところを航海していることになるのです。

「神の選びだけに捕らわれたことが、実はイスラエルの人々が、御父ヤハウェをこの世界のメシアと認められなかった真の理由であり、つまりは、それこそが、御子イエスをキリストと認められなかった理由でもある。」ということになるわけです。＿
彼らは決して、自分たちがイエスに抵抗しているとは思っていなかった。ただ自分たちこそが真実のメシアを待望している純粋な神の民であって、自分たちの中にこそ、メシヤは来たるべきなのだと。だから、異邦人たちや神の御言に忠実でない人々の中に、神の子がお住まいになることはあってはならない、あり得ないことだと考え続けてきたわけです。

そして、神の子と称するイエスが、生まれて飼い葉桶で寝かされたことも気に入らない、北のガリラヤ、貧しい漁村、農村である地方で伝道を始めたことも気に入らない、それらは、自分たちがここだと思っている「神の港」ではないと、彼らは断固主張するのです。そういう意味で、イエスはキリストではないと彼らは判断を下したのです。
ただ彼らは、「ここが安全な港だ」と考えていたその最終目的地が、この世の荒波に押し流されて、ずれてしまっていた。それで、本来着くべき港ではない港を、自分たちの着くべき港だと判断ミスをしてしまったところに、問題が生じたわけです。

そうした背景をしっかり踏まえながら、著者はヘブライの人々に向かって「あなたがたはイエス・キリストの御言に注意を払い続け、神が語られた御言にも徹底的に関心を寄せ、しっかりそれを見つめて生きていかないと、押し流されて、とんでもないところへ行ってしまいますよ」と警告しているのです。
　これは、当時のヘブライの人々、即ち、ローマに住むユダヤ人キリスト者に対して勧告された言葉であると同時に、今日の私たちに向かっても警告を与えられている言葉であると思います。
あなたがたの信仰が、着くべき港に向かって進んでいるのか、確かな歩みを進めているのか、あるいは、目を凝らし着くべき港を見据えて船を操ることをしないで、こうなるはずだと自分勝手な判断で、時に任せ、流れに任せてルーズに過ごしているならば、神が選んでくださった「究極の港」には、到底行き着けません。
(こうなるはずだと。自分勝手に考えてはなりません。)

第②節
もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、すべての違反や不従順が当然な罰を受けたとするならば、

ここからは、「天使」と「神の子」という対比が始まります。既に、1章の①節②節でも「天使」が取り上げられましたが、そこでは、天使を通して語られたという言葉は出て来ませんでした。代わりに、預言者とか、あるいは祭司、士師などを通して、神は間接的に語られたと記され、これが仲介者だったのです。けれども新約の時代には、御子キリスト御自身が直接にお語りになるのです。
この仲介者を天使という言葉でまとめて呼んでいるわけで、例えば、モーセが十戒を受けた際も、稲妻とか雷鳴とか様々な天使の業により、神の現臨の威光を轟かせたのです。しかしそれは、神から直接に届いたものではないという理解を、著者は促したのです。

ところで、②節は「もし〜〜ならば」という仮定形が使われていますが、この深刻な事柄の背景には、やはり私たち一人一人が、神が告げられる処罰に対して、自分たちが冒した罪をどう捉え、どう受けとめているのかが問われているわけですから、ここで使われているのは、通常の仮定形の構文ではないのです。

つまり②節の構文は「もし、万が一、こういうことがこれから起こったならば」という（一般的仮定文）ではなく、「もし、あなたがたの中に、現実として違反や不従順が明らかに

ある**の**ならば」ということ（確信的仮定文）であって、「既にこの事は明確に起こっていることだ」と、著者は言わんとしているのです。

先程「あなたがたは次第々々に押し流されてしまっている」と言いましたけれど、押し流されてしまっていることについては、この先3章⑫節に、彼らの現状に対し、こんな言葉が述べられているのです。**「兄弟たち、あなたがたのうちに、信仰のない悪い心を抱いて、生ける神から離れてしまう者がないように注意しなさい**」と。
言い換えると「あなたがたの中に、そのようなことが現実に起こりかけていますよ。いや、もう既に、そのようになった者がいますよ」と告げているのです。

あるいは、もし少し先の6章④節からのところに、
「**一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、神のすばらしい言葉と来たるべき世の力とを体験しながら、その後に堕落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。**
土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます」とあります。

神がくださった恵みの雨（聖霊の力やお働き）に対して、どう応答をしているかが、ここでは大事な問題なのです。良い味の実（悔い改めの実、御霊の実、伝道の実）を実らせるようにと、豊かな雨を吸い込んだ土地（聖霊で十分に潤されている教会や信徒の群れ）が耕す人々（そこに生きる民）に役立つ農作物（信仰の糧）を豊かに実らすなら、神の祝福を受けますけれども、神の御思いでなく、各自が其々自分の思いを遂げようとして、茨やあざみ（主の救いや恵みを遮るもの、福音伝道を妨げるもの）を蔓延らせたならば、それは焼き払われてしまう土地となるのです、祝福は受けられないのです、反って呪いを受けるのです、と訴えかけているのです。

キリスト教会の中では「呪い」という概念はあまり使われません。神は私たちを祝してくださるが、呪われる御方ではない、という考え方が確かにあります。
それを著者は、ヘブライ人に向かって語る時には「神は、そうでない者には、そうでない者としての負の報いを当然与えられる」という因果応報論による「救いと滅び」あるいは「恵みと罰」という対比として、明確に表現しています。

私たちが普段、福音書を読んで感じる感じ方とは多少違った意味合いの言葉が用いられていることは事実です。しかし、旧約の中にはそういう「呪い」も沢山出て来るわけで、正にそういう背景をもって神との出会いをしているヘブライの人に向かって語るわけですから、そういうことになるのです。

②　節前半

まして私たちは、これほど大きな救いに対してむとんちゃくでいて、どうして罰を逃れることができましょう。この救いは、主が最初に語られ、それを聴いた人々によって私たちに確かなものとして示され、

②③節をまとめますと、「天使たちが語りました、天使たちが告げました、そして、その事柄が歴史の中で現実になりました。しかし、それよりもっと確かな御方、神御自身が語られました。」となります。
この「語られました」（ラレオー）という言葉は同時に「神が御子によって語られた御言」という意味で「福音そのもの」と記されます。神が私たちに与えてくださった「救いという形を示されて」で語っておられるわけですから、ここから「その福音と律法ということが対照的に出てくる」のです。

天使たちがあなたがたに向かって語った言葉、そのひとつは「律法」である。そしてその律法はそれなりに意味を持っていた。その意味については、パウロがガラテヤの信徒への手紙の中で書いています。それも、同じようにガラテヤのディアスポラ（異邦に住んでいたユダヤ人キリスト者）に対して語った言葉ですから、その意味では、ヘブライ人を想定して書かれているのですが、ガラテヤ書3章19節に出ているのです。そこには、
「**では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られる時まで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神は一人で事を運ばれたのです**。」と書かれているのです。

言い換えると、天使たちを通して語られた律法は、色々な人々の手を通してあなた方に与えられていったけれども、<u>イエスは神の御子で、直接的に語られたので、もはや仲介者の必要はなくなった</u>のだと、告げているのです。
だから、イエス御自身を見上げ、イエス御自身の御業を確かめ、イエス御自身に従って行くならば、当然その御方の御言、即ち、福音に到達できるのです。律法というまどろっこしい方法を通して間接的に神と関わる必要はなく、直接的に関わらせて頂けるチャンスが到来したのだと、パウロは語っています。
従って、神の御子が現れられて、直接語られるまでには、中間的な存在として天使が語り、律法が与えられて「神と出会う一つの筋道」があなたがたには提供されていたのです。しかもその律法が「神の御子が現れるまでの限定された役割を担っていた」のです。

「律法」はその意味で、時が流れ、時代が移ってい行くと、その時その時代に応じて内容の変遷をしていかねばならないのです。色々な人々が加わるにつれて、そういう人々が適応していけるためにも、どんどん細則の数が増えていきました。
ところが福音は、誰が聞こうと、どのような人々と出会おうと、どんな時代になろうと、御子御ひとりが具体的に御自身で語られる、唯一の救いの御言だけで十分なのです。天使は沢山語ったかもしれませんが、イエスは**一つの**救いだけを語られた。真理の御言だけを語られたのです。
（福音の不変、永久的）

例えば、律法に対して心を向け、それによって救われようと思う者は、沢山のことを（細則のすべてをクリア）しなければならないが、キリストの福音によって生きようとする者はたった一言「イエスは救い主である」と告白すればそれでよろしい。」多くのことをごたごた考える必要は全くないのです。

律法はあなたがたを神の方に導く導き手であって、それ自体は不完全なものだけれど、キリスト・イエスの御言は、それだけであなた方を救う完全なものである、という**ような**意味もこの中に含まれています。

神の御言そのものが、完全にあなたがたを救うもので、神の国に招く唯一の真理なのです。そしてそれは現在、私たちに与えられている真の恵みであると語っています。「**大いなる救い**」というタイトルの「大いなる」という言葉は正にそこにかかっています。一つであり、一つであるがゆえに完全であり絶対である、そういうものだけが「大いなる救い」であると著者は訴えています。

②節で言われている、（天使を介した）律法が、あなたがたに対して約束した事柄さえ、事実あなたがたの中で実を結びつつあるならば、神が語られた真理の御言(主イエスの福音)、それはあなたがたに対して確かな働きを持ち、救うことであるのだから、その神の御言への働きかけ（宣教・伝道）に対し、無頓着でいてよいのでしょうか

（無頓着の意味、その戒めはグサリと胸に刺さります。）

この無頓着というのは、先程言いました航海用語のパラレッオー（押し流される）という言葉と結びつけながら語られているのです。注目し続けなくていいのだろうか、その事柄に対して関心を寄せ続けなくていいのだろうか、他のことなど考えていていいのだろうかと、とても大切な問題を、私たちに提起してくれているのです。
結局、あなた方はこの世の力や様々な思いによって「押し流されてしまわないように」、キリスト・イエスによって語られ、お聴きした神の御言に、注意を払い続けて行かねばなりません、そこに集中して生きて行かねばなりません、ということがここで述べられています。その上で、次の言葉に入っていくわけです。

②節の「**もし、天使たちを通して語られた言葉**（律法）**が効力を発し、すべての違反や不従順が当然の罰を受けたとするならば**」という、そういう可能性も認めるならば、つまりり、神の選民であることの責務を尚も認めているならば、この③節「**まして私たちが**」の「**まして**」という言葉が、非常に重要な意味を持って来るのです。

言い換えれば、あなたがたが、今の自分を、神キリストの選民だと認じているならば、それ以上に、キリストが約束くださった神の大きな救い、破格な救い、しかもあなたがたの努力によらずキリスト・イエスによって完全に遂行されたあなたがたの救いを信じてやまないならば、律法違反にさえ罰を下されたというこの②節のみ告げに対して、無頓着で**いられる**はずがないと訴えています。

更には、神の御言が真実であると、天使を介した律法の中でさえ認識することができるのなら、「**ましてや**」御子御自身が語られた福音に対し、無頓着でいられるなどありえないではないか、と訴えかけているわけです。（この松山先生の読みは独特です、最高ですね。）

この「無頓着」というのは、ギリシャ語でアメレオーという言葉ですが、この言葉は「ある事柄に対して真剣に考えないで、適当に応答のそぶりをしている姿、人からものを言われた時に、その事柄を真面目に考えないで適当にあしらっていく姿」を表わしているのです。ですから、神から問いかけられ**て**も、その問いに対して真剣に、全身全霊を傾けて応答せずに、応答どころか、適当な返事ですり抜け**ようとする**生き方、それが、自身へのディスカウントという意味も含めて「無頓着」と記されているのです。

ですから、一般に私たちが考える「無頓着」とは大分違うのです。「**ましてや**」神の御言に対して、どれだけ真摯に自分自身の歩みを方向づけていますか？　どれだけ真剣に神の問いに応えようとしていますか？ という問いかけに、イニシアティブをとっておられるのは、何を隠そう「神」御自身なのですから。

そこには、あなたがたの祈り願いがどれほど効力を帯びたか、などは全然書かれていないのです。「神」が語られただけが、どれほど真実なものになったか、ということが問われているのです。あなたがたの希望がどれだけ意味を持ったか、などとは全く書かれていないのです。神が語られた御言が、どれほど真実とされているのか、ということだけが問われているのです。つまり、当時の選民思想から出発したものの考え方と、この手紙の著者の考え方とは、起点も終点も全く逆なのです。　　（やっぱり、そうなんですね。）

当時のユダヤ人は「選民である我々は、神によってどれだけ幸せになったか、どれだけ繁栄と祝福を受けてきたのか」ということを、何時でも問題にしていました。それに対して著者は、神が語られた御言に対して、どれだけ真剣になり、どれだけ忠実であったのかと、問いかけているのです。

神がどうかを詮議するのではなく、神は完全な救いを語られたのだが、その完全をあなたがたは完全に生きたのか、あるいは不完全で曖昧にしているのか、ここの言葉でいうならば「無頓着」だったのか、適当に応じてきたのではないか、ということが問われているわけです。

信仰生活とは、この著者が言うには、常に神との間に真剣で敬虔なる関係を結び、保ち続け、それによるこよなき至福を味わう日々なのです。私の今日は「神によってのみ」位置づけられ、正しく方向づけられ、確かな意味を頂いている。そのような揺るぎない確信と信仰的深みに達するために、この手紙は綴られていると言えるでしょう。

しかも「イエスをキリストと信じること」は、特に迫害が起こっている時代の中においては、何時でも滅びの力との拮抗状態に置かれていました。神を信じるがゆえに、この世の力によって、この身が無惨に滅ぼされる不安を抱いて生きるのか、あるいは、この世と妥

協するがゆえに、神の霊が去り、神に呪われて、魂が滅ぼされる怖れを抱いて生きるのか、どちらの滅びの道をあなたがたは選びますか？ という問いかけであると考えます。

「二択の滅びを選び取る」ということは、ちょっと私たちには考えつかないです。けれども著者は「あなたがたが滅びと考えるのは一体どういうことなのだ」とも迫ってきます。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな（マタイ10：28）」という主の御声が聞こえてきます。

だが、尚もあなたがたは、うまく世渡りをしていくことが、生き残ることであって、それが滅びないことなのだと考えているのだとしたら　もし、そうであるならば、「それは逆に、決定的な魂の滅びをもたらしているのですよ、自分が自分を滅ぼしているのですよ」と、著者は語ろうとしています。そんな意味内容を、この短い箇所の中で、私たちは大変厳しく問われているのです。（「あなたが滅びと考えるのは、どういうことですか」と問われます。）

③節の後半、

この救いは、主が最初に語られ、それを聴いた人々によって
私たちに確かなものとして示され、　（第④節　さらに神もまた、・・）

と④節に繋がっていくわけですが、主の御言が「信仰をもって生きることの原点」ですね。それが私たちの信仰生活のどこにあるのか、それは観念の中だけでなく、現在私たちが生きていることの中に生かされていなければ、意味がないのです。

かつてあの時選ばれていた、ということを幾ら旗頭に掲げて立ち上がっても、今、あなたの中に救いの確信が成就されていないならば、それは意味など持っていません。必要なのは、今尚、神が選んでくださっているという発想ではないのです。選ばれた者の子孫であるから、私もまた選ばれた者であるという選びの継承が現在まで生き延びていて、自分が神に応答することによって成り立っていることではないのです。
過去において選ばれたことを言っているのですから、彼らの信仰の歩みは過去に思いを向けることでしかなく、今の自分を生かし動かす力ではない。それは、過去に選ばれた自分たちが、今ずれてしまった時代の中に置かれていることだから、過去に自分たちを選んだ神に責任を取って頂きたい、と言うのがユダヤ人の講釈なのです。(今の紛争の通りです。)

救いという事柄は、過去形では駄目なのです。「今、私はこの時代の中に生かされているがこの時代の迎合者ではなく、神の歴史に生きる者として、この時代に立てられているのです。神から遣わされた者としてこの世に生かされているのです。」という信仰的に高い見識があるかどうか、という問題なのです。
つまり、神の御言が私たちの救いになるのは、かつて語られた「あの御言が、あの時、あのところで」救いになったということではないのです。今、語られている神の御言が、今の私を救っている、ということでなければ、救いは力を発揮しません。今、神はこの私を赦し、この私を支え、この私を生かしてくださっている。だから私は今を生きているのだ、ということでなければ、あなたは、何の意味も持てないことになるのです。

（ここに、アーメン、アーメンと言えることが、幸せなことです。）

そういう意味で、私たちは直接的にしかも徹底的に主を通して語られたその御言、即ち、それが福音であるわけですけれど、その御言を本当に聴くことなく、受けとめることなしには、信仰に生きることはできない、ということになるわけです。

しかし、これは非常に厳しいことです。ですからこそ、「あなたは語るのではなく、聴くのです」と著者は呼びかけているのです。それは同時に、預言者が神の御言を受け、様々な時代の中で『神に立ち帰れ!』と叫んだ姿勢と、全く同じなのです。（神を見上げよう。）ですから、私たちは絶えず、今、主が語っていらっしゃる御言に関心を向け、注意を喚起し、全力を傾注して聴いてゆく。そしてそれに応答していくことがなければ、信仰は信仰にならない。救いは救いにはらない。ということをここでは語っているのです。

（主は語り続けておられます。）

「**この世の力、この世のことに耳を傾けるな**」は、この世の波風に揉まれている状況に対して、助けて欲しいというような叫びを上げるのではなく「神を見上げなさい、よしんば、この世の力に飲み干されるようなことが起ころうとも、必ずや、神はあなたがたを支えられる」と。（そうです。確かに支え続けてくださいました。）

そして「**この世の力にあなたが飲み干されるような現実が起ころうとも**」という部分は旧約の中、特に出エジプトという出来事の中では再三再四出て来るのです。御言として神は与えてくださる。紅海の前に立ったイスラエルが、追いかけてくるエジプト軍の力によって飲み干されてしまいそうになる。その土壇場において、神は海を開いて、彼らを渡らせてくださる。そして、イスラエルを飲み干すはずであったあのエジプトの大軍隊が、神の御力によって波に飲み干されてしまい、彼らは滅び、イスラエルは救われるという奇跡が起こるわけです。言い換えると、神の逆転劇がそこで起こるわけですね。

それは、この世がどう考えようと、誰が何を求めようと、そんなこととは全くおかまいなしに、神が一方的に成された恩寵の御業であった。その真実を聖書の上で経験しておきながら、あなたがたは尚、神だけに頼ることに不安を感じて生きている。別な言い方をすれあなたがたは尚も、世の力で安心な状態がもたらされるのを求めている。そういう「今の生き方」の中に、神との具体的な関わりを求めても、神は何も引き起こされませんよ、ということが、非常に強調して語られているのです。（一言もなく、心中が見透かされてしまう）

主が最初に語られ、それを聴いた人々によって伝承され、私たちの中にも確かなものとして残してくださったすべての事柄の根源は、神にあられます。それが私たちの中で確かなものとされているという現実に着目しなければならない、と著者は語っています。

そう言う著者は、ある意味「押し流された現実の中ででも、いつかはきっと良い芽が出るだろう」ということを考えて、主の再臨を待っているようにと告げているのです。ところが、既にメシアはおいでになったけれど、ヘブライ人の彼らには、自分たちが描き出している「港」とは違う場所だったものですから、「あそこに主は来ていないのだ」と主張し続けているのです。（そうです。歴史の不安の根っこ）

そんな自分勝手な再臨シーンをいくら待ち続けても、彼らにはメシアの来臨はもうないのです、と著者は断っています。主は既においでになった。そして御自身で語られた。語られたことが実現した。だから、あなたがたはその御言に対し、然りと受けとめるのか、否と排除するのかを、明確にしなければならない。「どっちつかずでいてはいけない」と告げるのです。　　（この手紙の受け手、私を含め、どのような人たちなのかが分かります。）

正にイエスは、そのどっちつかずを嫌われ、お赦しにならないで、非常に切羽詰まった一つの状況を私たちの前にお示しくださったのが「あの過越の祭りにおける十字架」であられます。もうそこでは、十字架に架かられるイエスを私たちのメシアとして信じるか、あるいは、十字架に架かってしまったらもうおしまいだから、彼に従うのは止めようと考えるか、どちらか一方にしか、道はなかったのです。

心の中ではイエスに惹かれながらも、現実の力の強さに圧倒されてエマオの道を歩いていた弟子たち、彼らはどっちつかずでした。正直言えば、恐らく99%までは「あの方ではやっぱり駄目だった」と思っていたでしょう。
しかし、残り1%の信仰が、イエスの御言の御力に目覚めさせたゆえに、彼らは復活のイエスと本当に出会**えた**ことが起こるわけです。現実にイエスに心を向けている者には、主御自身が積極的に近づいて出会ってくださる。それは過去においてどうだったかではなく、いつでも「今」があなたの救いの時なのだ、ということを明確にされるためです。
（今の救いというのが、今の私には幸いです。）

イエスが、隣に十字架につけられていたひとりの強盗に向かって語られた御言も、「あなたは『今日』私と一緒に天国にいます」というものでした。主とのお出会いは、いつも「今日、今」なのです。「やがて」ではない、いつかではない、かつてでもないのです。「今、私たちは、主よ、あなたと共にいます。」ですから私たちは、神の御言を今語られている言葉として受けとめ、聞き続けていかない限り、私たちにとって福音は遠いものとなって、こぼれ落ちてしまうかもしれません。それでは主の十字架の意味が立ちません。
（ヘブライ人への手紙の著者も松山幸生先生も厳しい語りの中に主の光を灯してくださっています）

第④節
更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。

さて、ここからは「神が、私たちに対して証しをしてくださった」と書いてあるのです。ですから、証言くださるのは、主御自身なのです。しかも、語ってくださったことは、主の自己証言と言ったらよいでしょうか。ですが、最初に主が語られたその奇跡、その救いを聴いた人々の証言によって、様々な形でその内容紹介が付け加えられ、証言が厚みを増していきました。そういうわけで、④節には「**しるし、不思議な業、様々な奇跡、聖霊の賜物**」という言葉で、人々が付け加えてくださったものが列挙されているのです。

しるしとか、不思議な業とか、様々な奇跡。ここに書かれている言葉は普段教会で使っている言葉とは違いますね。なぜ、こんな言葉が最初に出てくるのかと申しますと、これは無論、ヘブライ人に語っているからなのです。
実は彼らは、自分たちの拠り所にしている申命記の言葉を、常に心に携帯していたからです。申命記4章㉞節に、その言葉が出てまいります。あるいは、ネヘミヤ記9章⑩節にも出てまいります。そこでは、神が私たちに、神御自身が働いていらっしゃることを、色々な「しるし」や「不思議な業」や「様々な奇跡」を通して、示しておられます。

申命記の4章㉞節以下

㉞あるいは、あなたたちの神、主がエジプトにおいてあなたの目の前でなさったように、<u>さまざまな試みとしるしと奇跡を行い、</u>戦いと力ある御手と伸ばした御腕と大いなる恐るべき行為をもって、あえて一つの国民を他の国民の中から選び出し、御自身のものとされた神があったであろうか。
㉟あなたは、主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った。
㊱主はあなたを訓練するために、天から御声を聞かせ、地上に大いなる御自分の火を示された。あなたは火の中からその言葉を聞いた。
㊲主はあなたの先祖を愛されたがゆえに、その後の子孫を選び、御自ら大いなる力をもって、あなたをエジプトから導き出された。
㊳神はあなたよりも強大な国々をあなたの前から追い払い、あなたを導いて、今日のように彼らの土地をあなたの嗣業の土地としてくださった。
㊴あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め、
㊵今日、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。そうすれば、あなたもあなたに続く子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる。

出エジプトの際、ファラオの前で展開された不思議なる神の出来事、荒野を旅して歩いたイスラエルが40年間も飢えないでいたこと、渇かないでいたこと、しかも神は、彼らを御自分の御心に適う者に育てようとされ、そうした危機的限界状態における神の奇跡や恵みの御業を通して、イスラエルを「訓練」してくださった。そういうものを全部ひっくるめて「しるし」とか「不思議な業」とか「様々な奇跡」という言葉で表現されています。ですから、更にこの内容がどんなものであったかと言えば、旧約聖書（特にモーセ五書）をずっと読んでゆけばいいわけで、神はこんなことも、あんなこともなさったということが、ありありと見えてくるはずです。

神の御言に従っている者に伴う神の勝利、祝福というものは、例えば一人の預言者エリアについて見れば、烏に養われて暮らしていたことも実際本当に起こったわけです。あるいは、干上がってしまった河の畔に暮らしながら、彼は渇くことがなかったという証言も、正に神がなさった不思議な御業であるわけです。そういう一つ一つの事柄を私たちが、聖書を通して体験し、神を知っていくことは、とても大事なことなのです。

それらに対して著者が「聖霊の賜物」という言葉で表現しているのは、新約聖書の時代になって**生じてきた**ことです。一番集約的な形では、ペンテコステの出来事で、教会誕生という事柄を捉えても「聖霊の賜物」という形で語っています。
これら実に様々な神の事柄を、奇跡とか聖霊の賜物と称するのは、旧約だけではなく、新約ではイエスのなさった御業を様々な奇跡と捉えています。それは、初代のキリスト教徒の間でも多く用いられてきた言葉でしょう。

「聖霊の賜物」という言葉は、キリスト教の長い歴史と伝統を反映させながら、イエス・キリストによって救われたのは、過去に、あるひとつの民族が神の選民とされたという、あのスタートラインにあるのでなく、あなたがたを、イエス・キリストが自身の十字架刑によって贖い取ってくださったこと、そして、神があまねく御霊を送られて聖め、導いてくださったことによって、神の裁きを免れ、救われた者となり、神に従う者となったことを、語っています。　（それを確認させてくださっています。）

今日の聖句は、どれも短い箇所ですけれど、大変重要な幾つかのポイントを持ったものであると思います。初代のキリスト教徒たちが、今日の新約聖書をまだ聖書として所持していなかった時代に、福音の内容を何とかして伝えていこう、キリストの真理として多くの人々に語っていこうとした時に、先ず、時代背景や、彼らが有していた世界観をしっかり調べることは、とても大事なことだったろうと思います。　（まことに、その通りです。）

そのことによって、彼らの生きざまを知ると同時に、その事柄に共感をもって、自分たちの生活の中に再構築していきました。そういう方法によらなければ、新約聖書が未だ与えられていなかった彼らを、クリスチャンとして捉えていくことはできなかったと思います。彼らのことは文書には残されていませんが、「語られた、そして聴いた」という二つの言葉の「緊張関係」によって、たえず神との関係を捉えていく、そういう方法でこの手紙が書き続けられていたのだと思います。

本当にあなたがたが「大きな救い」という、神が与えてくださった救いのビジョンをしっかり自分たちの中に構築し、そのように生き始めていかない限り、福音からは縁遠いものになります。それで「押し流されてしまいます」ということを語っているのです。

神の絶対的な救いから、私たちを押し流していく潮の流れ、向かい風の力、それが私たちを取り巻いています。例えば「近代化」とか「合理主義」とか、あるいは様々に表現されている今日的なイデオロギーの中で起こってくる「幸福論とか平和論」というものが一つ一つ、神の方向に向かって進んでいこうとする私たちの船旅の航路を押し流し、変更させていく力となって働くことに注意喚起し、しっかりと見据えて行かねばなりません。
（松山幸生先生は現実を直視されて、逃避されなかった。向かって行かれた。常時祈られながら。）

「イエス・キリストは主である」ということは「イエス・キリストも主である」ということとは根本的に違うことをはっきりさせなければいけません。「唯イエス・キリストが我が主なり」と言い切れる時、「イエスは救い主なり」という信仰告白も成立するのです。

ですから、私たちが**主に**選ばれ、**主に**救われたということは、私たちが「大きな救いの恵み」を、この世に分かち与うる責任を託された存在でもあるということです。
それゆえ、私たちがその救いの船を操る時には、この世の人々を誤りなく「キリスト・イエスによる救い」に導くことを踏まえ、片時も気を緩めることなく神の御言を聴き、それに対して応答し続けてゆかなければなりません。その応答が、いつの日か、私たちすべてのキリスト者の、満ち溢れる喜びとならんことを！　　（1996年3月9日）

森容子先生による説教

「御言がさばく日」

ヨハネによる福音書　１２：44－50

本日は神のさばきについて、ヨハネ福音書12章から御言をお聴きしましょう。

44－45　**イエスは叫んで、こう言われた。「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。**

この先14章に入りますと、主はもっとはっきりとした表現で「**あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。いや、既に父を見ている。**」とか、「**わたしを見た者は、父を見たのだ。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。**」と言われ、御自分と父なる神様とが一体であられることを強調されるようになられるのですが、この時点では、まだ主は、「わたし」と「わたしを遣わされた方」という漠然とした関係として、御自分と御父とを取り扱っておられます。

それはそうでしょう。いきなり、天地万物の創り主、全知全能の父なる神様と、この世に今人間として生きておられるイエス様とが、父御子のご関係で、両者は一つであられると告げられても、主の弟子たちを始め、それを即座に信じ受け入れられる人々がいるとは思われない、と主は踏まれたのでしょう。確かに弟子たちは、主の御手による奇しき「しるし」を幾度も目にしてはいても、それはそれ、これはこれで、「信じる」というお話のレベルが違い過ぎます。物事はステップ バイ ステップ、順を追うのが肝要です。

とは言え、主には、十字架の道行の時が近づいておられ、そうゆっくりと彼らの信仰が熟するのを待ってばかりはおられません。ここから主が語ってゆかれることは、民衆の前で公に語られる最後の御教えであり、より深い神の領域、神の秘儀、奥義に入ってゆかれる事柄であり、恐らくは、主がお墓から復活された後に、弟子たちがその御言１つ１つを想起し、その意味の深さを、義しさを、心にとめることとなったことで

ありましょう。それらが44節の「**主イェスを遣わされた方を信じる**」ことと、45節の「**主イェスを遣わされた方を見る**」ことの内容です。

そればかりか、この「信じる」「見る」ということの義しさと最重要性を世界中に宣べ伝えるために、彼ら弟子たちは出て行って、命懸けで働き、実際、殉教した弟子が数多くあったのです。また、この福音書を含む四つの福音書は、そうした背景において、各々が書かずにはおれない必然の状況下で著された書でありました。

46　**わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に来た。**

「**光として世に来た**」という記載は、ヨハネ福音書と創世記の冒頭を想起します。まず、ヨハネ福音書の冒頭１：１－５にはこう書かれています。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

「初めにあった言（ロゴス）」そして「**人間を照らす光**」というのが、イエス様のことですね。また、「**暗闇は光を理解しなかった**」の「理解する」と訳されているのは、カタラムバノーという言葉で「圧倒する、征服する、虜にする」という意味を含みます。つまり、光なるイエス様は、暗闇に圧倒されない、征服されない、虜とされない御方、むしろ、暗闇に勝利する御方である、ということです。

また「**暗闇**」とは、自分がどこから来、何のために生き、どこへ帰ってゆくのかが皆目見当もつかない、迷い子、孤児、滅びの者の立ち位置を示します。しかも、それは同時に、悪霊の頭サタンが、都合よく働ける場であるとも言えるのです。

また、創世記冒頭1：１－５にはこう書かれています。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。

ここから分かることは、私たちのために神様が創造された天地は、混沌と闇と深淵が、まず必要条件として設定されていたことです。そして、その対極には「**光があった**」のです。この「光」とは、神様に創られたもの（被造物）ではなく、「あった＝存在し続けておられた」ということが、重要です。また「**神は光と闇を分け**」という言葉も重要で、神様の天地創造の御業は、所謂「無から有を創り出す」ということではなく、「既にあるもの同志を、分ける」或いは「既にあるもの同士を、集める」という「分ける・集める」が、中心なのです。

つまり、「**光**」に集められる一群と、「混沌・闇・深淵」に集められる一群とを、『分ける』という住み分け作業が、これから行われてゆく人類の歴史、救済史の形成の手

始めと言えるのです。こうして、His　Story　が、始まるのです。

47　**わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。**

『さばく』という漢字には、裁判の裁くもありますが、審判の審く、更に、魚をさばくとかハンドルさばき等に用いる「捌く」という字もあります。この「捌く」を含めて『さばく』には、「処理する、こなす、片付ける、選択の判断をする」等の意味がありますから、集約すると「分ける／集める」という作業を意味していると言えます。ですから、この「さばく」ということこそ、神の創造の御業と言えるのですが、イエス様は、それは、今は、御自分の役目ではないと言われます。

一方、『すくう』という言葉も、救済の救うが一般的ですが、水を手ですくうの掬うもあり、更に、虫がすくうの巣食うもありますね。不謹慎な語呂合わせのようですが、これらを集約すると、「集める」という意味になります。皆さん、面白いとは思われませんか。

ですから、イエス様は47節で、御自分が来られたのは、人々の群れから白と黒とをきっちり「分ける」という御業のためではなく、人々を御自分の方へ、ひたすら「集めて救う」という御業のために来られたと、言っておられるのです。

そのように、主が「**世を裁くためではなく、世を救うために**」来られたことは、『黄金の御言』と称されるヨハネ福音書3：16－17「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。**」に表わされています。更に、8：15で、姦淫した女性を石打ちで裁こうとしている者たちへの主の提言、「**あなたたちは肉に従って裁くが、わたしは誰をも裁かない。**」にも表わされています。

48　**わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。**

確かに47節で主は「**わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。**」と仰いました。しかしそれは、主が未来永劫に裁かぬと言われることではなく、ここ48節で語っておられる「**終わりの日**」には、裁きが起こるのです。それは、主が裁かないと言われたことと矛盾しているわけではありません。47節は、主の御言を守らないという罪に対し、（悔い改めに至るまでの期間）執行猶予をつけくださるということなのです。正義を何より重んじられる神様は、罪を最後の最期まで放置したままにしておかれる、という御方ではありません。

では「**わたしの語った言葉が裁く**」とは何のことであられるか考えてみましょう。

もう一度、先ほどのヨハネ福音書3：16－17の続きと、8：15の続きをじっくり読んでみます
と、合点がいくでしょう。　3：18－20にこうあります。

御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。

また、8：16にもこうあります。

しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。

つまり、主御自身は「裁き」には直接手を下されないが、御子が語られた御言を受け入れないということ自体が、もう「裁き」となっており、その人は既に「裁かれている」のだと仰るのです。父なる神様はそれほど、御言なる神、御子イエス様を深く愛し、心から信頼しておられるということです。

イエス様の言うことを聞かない人、最後の最期の終りの日まで、主に聴き従わない人は、主に代わって父なる神様が裁かれます。その裁きとは、「光」より分けられて、「混沌・闇・深淵」の一群に集められ、一括して断罪されるということです。

49－50　**なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。**」

主はかつても同じことを語られました。 8：28－29です。

「**わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにしてはおかれない。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである。**」と。

この先「**これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた。**」ともあります。ですが、唯一点、8章と12章とが違うのは、「**父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。**」の「**永遠の命**」という御言です。それは、その間の11章で起こった出来事、ラザロの死と甦りについての父なる神の御心を踏まえての御言です。あの出来事は、見かけは、死から復活させて頂いたラザロの人生が、一時的に延長されたに過ぎなかったことかもしれません。いずれラザロも年老いて、必ずもう一度肉体の死を迎えたでしょうから。ですが、甦りのラザロはもはや只の人ではありませんでした。彼は、主の御言を信じる者が「**永遠の命を受ける**」という上での、生き証人となった人物です。

私たちは教会で「**永遠の命**」という言葉を説教等でよく耳に致します。ある意味、慣れ

親しんでいる範疇に入っている言葉かもしれません。しかし、よくよく考えてみて下さい。「永遠の命」ほど、古今東西の人類が欲し続けてきたものはありません。ですが、お金を山と積んでも、善行をせっせと積み上げても、自らを打ち叩いて修行に修行を重ねても、或いは、日々祈りに祈りに祈っても、自分が向いている方向を誤れば、永遠の命は、決して受け取れません。御言なる神、イエス様と確かな霊的な繋がりを持たせて頂けなければ、全ては虚しいこととなるです。

ここでＩコリント書の愛についての箇所を開いてみましょう。12章の最後に「**そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。**」とあり、続く１３：1－3には、

「**たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。**」とあります。

主にとって何の益もないとは、「永遠の命を授けるという、父なる神様からの至上命令が全うできない」ということです。私たちは、イエス・キリストという御方と、愛と愛、信と信、生命と生命とで、深く結びあい、繋がっていなければ、天からの永遠の命をお受けできません。永遠の命は、主から直接「手渡し」で頂くものだからです。そして、その保障として、心に聖霊の刻印が押され、私たちの内に、豊かな聖霊のお働きが始まります。 永遠の命とは、どこからか宅急便が届いてきて、三文判をポンと押し、「ご苦労様」と受け取るものとは、明らかに違うのです。

そしてもう一点だけ述べたいことがあります。先の48節の「**わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。<u>わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く</u>。**」という中の「**裁くもの**」とは何かという命題です。

ここを原典に忠実に訳しますと、「**<u>わたしを退け、わたしの数々の言葉（レーマ）を受け入れない者に、わたしは彼を裁くものを持っています。わたしが語った言（ロゴス）、それが終わりの日に、彼を裁くでしょう</u>**。」となります。ここで、「<u>言葉を**受け入れない者**</u>」は単数で、「<u>**彼を裁くもの**</u>」も単数です。また、レーマは当然複数で、ロゴスは単数です。ですから、恐らく「<u>**彼を裁くもの**</u>」と「<u>**ロゴス**</u>」とは同じものでありましょう。では、それは何を意味しているのでしょうか？

ロゴスとは、先ほどお読みしたヨハネ福音書の冒頭に出てくる、「**初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。**」の中の「**言**」と訳されたものを表します。が、単にワードという意味ではありません。所謂「言霊；スピリット」です。ですから「言」は、御言なる神そのものとか、神の本質の顕れとも言えます。ゆえに、「天におられるイ

エス様と、地において働かれる聖霊とが、御言において完全に一つとなられた存在」とご理解頂くのがよろしいかと思います。

　そうしてみますと、48節の戒めは、聖霊冒瀆の罪の指摘のような聖句と解釈するのが、ほぼ正しいのではないかと思われます。　聖霊冒瀆の罪は、マタイ12：31－32に「**だから、言っておく。人が冒す罪や冒瀆は、どんなものでも**（終わりの日までの執行猶予付きで）**赦されるが、霊に対する冒瀆は赦されない。人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない**。」とあり、また、ルカ 12:10にも「**人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されない**。」と明示されています。

　更に聖書には「**御言の剣**」という裁きのアイテムがありますが、そうした御言は両刃の剣で、人の心の髄と髄とを切り分け、刺し貫き、最も奥深い処へも突き刺さります。そしてその最も痛む傷口へ、神様が御慈愛に満つるエキスを、惜しみなく、淀みなく注入されてゆきます。それは神の計り知れない愛と義、真理の御言です。
　しかし、御言の剣の先鞭を受けて尚、不義不従順なる罪に悔い改めをなさず、神の注がれる御慈愛に与かり縋ることも一切拒否する者には、終りの日、主のご再臨の日に「裁き」が定められていることが、ヘブライ人への手紙9章27節に記されています。
「**人間は、唯一度死ぬことと、その後、裁きを受けることが定まっている**」と。

　しばし、愛と義なる御方、永遠の命を司られる神様に、黙祷をお捧げしましょう。

写者ご挨拶(2021/10/08再掲)

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の転写は私自身の信仰の立て直しを目的として始めましたが、試み始めますとそれが「大それた試み」「身の上知らずの無謀な試み」であり、それには「鳥肌のたつ怖さ」を感じました。正確に転写することもままならず、信仰の弱さのみならず、聖書の常識にもこと欠く自分に直面しました。
そこで、無知を恥とせず、厚かましくも松山幸生先生の奥様清子夫人に相談いたしましたところ、日本基督教団峡南教会牧師・森容子先生をご紹介いただきました。ご多忙の中、9月23日ご面談頂き、校正のみならず、教理の解説、あるべき立ち位置を、ご教授いただくことをお引き受けくださいました。
今回4回目になりますが、私は次のように森容子先生に感謝のお手紙を出させていただきました。私信ではありますが、私の今の心情を率直に述べておりますので、ここに記し教友の皆さまにお知らせいたします。
今後も忠実な転写をいたします。この講述に参加された先輩諸兄姉の皆さま、「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の原本をお持ちの皆さまには、時々転写に違いがあることに気づかれ

ると存じます。カナ文字が漢字になっている等、ほんの少しの編集をさせて頂きますことお許し頂きたく存じます。
松山幸生先生の話される凜然とした雰囲気を保ち、その臨場から溢れるお力に応答してゆきたく存じます。1000頁に及ぶ大講述でございます。皆さまのお祈りを頂き貫徹いたします。どうぞよろしくお願いいたします。　　（おはらやすお記）

森 容子先生へ (2021/10/08再掲)

主の聖名を讃美いたします。
先生、本当に有難うございます。この貧しき者のために大いなるお助けを賜り御礼の言葉がありません。
一点一画見逃さず、相応しい括弧、句読点、私の数々の誤りを忍耐強く、お目通し頂いて、私の存在をしっかり見守り、導き、励まし、お助け頂いておりますこと、真に光栄でございます。
今、つくづく思いますことは、「大それたことを始めた」「身の上知らずの無謀な試み」であったこと。そして感じていますことは「恐ろしい」ことを試みようとしている。
畏怖の観念がなさ過ぎたと反省しております。

もし、森先生なくば、結果は大変なことになるところでした。
もし、森先生なくば、この作業は誤謬に満ちたものとして読まれてしまう可能性がありました。それを思いますと鳥肌がたちます。
単に写せばいいという軽い思いつきで始めようとしていました。
しかし、正確に写すこともできない貧しい力に直面して、このまま進めば、誤った松山幸生先生を描き出す恐ろしい行為となりました。「主をなみする」ことになってしまうところでした。

ただ、小さな私の良心が芽を出し、というよりは私の無知が「何が主をなみすることなのか」の一節に、1カ月以上留めおいてくれたのです。無知を恥とせず、厚かましくも行動に出て、松山清子夫人にお尋ねしたことが、全ての始まりでした。ご夫人のご紹介で森容子先生のご指導を賜ることができるようになりました。なんと大きな驚くべき邂逅です。このカイロスを与えてくださった主に感謝いたします。9月23日峡南教会を訪問させて頂きました折には、ご夫妻で長時間、暖かい雰囲気の中で主の御言を説き明かしてくださいました。
私は森先生の寛容と忍耐に感謝します。森先生の深い信仰、鋭い洞察力、優しさ溢れる牧会力、地域に親しまれ愛され伝道に力を注いでおられるお姿に尊仰しております。

森先生はご主人様とお二人で私の誤字脱字の粗稿を一文字一文字指で押さえて読んでくださっています。抜けることなくご指摘してくださいます。文の段落、括弧の形、「てにをは」の修正、主語の追加等の形式ばかりでなく、私が理解できていない神学的な知識の加筆、松山幸生先生が言葉にされていない行間の意味を「一言の単語」を挿入するだけで、納得できる文章に仕上げてくださいます。「一文字の導き」に驚嘆します。

聖書は見かけは易しそうに見えますが、説き明かしなくして理解できるものではありません。特にヘブライ人への手紙は新約聖書と旧約聖書の橋渡しをする書簡で、紀元1世紀頃のヘブライ人の文化慣習を理解していなければ読み進めない所が多くあります。
しかし、この書簡ほど繰り返し重畳的に「十字架と救い」について宣べているものはないように私には思えます。
牧師の導きが絶対に必要な書簡だと感じます。私は自分のよちよち歩きの信仰を立て直す決意をした、その時に松山幸生先生の「ヘブライ人への手紙に学ぶ」に出会いました。
ひとりで読んでいけば、信仰が深まると思っておりましたが、豈図らんや「信」以前の「知」の貧しさに晒されることになりました。そして、無知のままに、すべてを受け容れてくださる森先生の前に裸で新しい着物を求めて原稿を送りました。

地方における牧師の働きは牧会だけでなく、地域社会とのおつき合い、建物の保全修理、環境対策等のお仕事があり、多忙な日々であることは、私には分かっておりましたので、校正のお願いはできないと考えておりました。しかし、先生は喜んでお引き受けしてくださいました。私は先生がどれだけのお時間をこの粗稿に費やされるか、ほぼ予想はできます。それ故に、申し訳けなく、忝く、感謝の心で一杯でございます。

ご指導を無駄にせず、一回一回前に進み、先生ご夫妻のご負担を少なくすることに努めなければなりません。そのことを通して私の修業が遂行されると考えております。
ご迷惑は一杯お掛けすると存じますが、どうかこの貧しき信徒をお助けくださいますようお願い申し上げます。お励ましのお言葉、本当にありがとうございます。
先生ご夫妻の、そして教会の皆さまのご健勝をお祈りいたします。在主。

おはら やすお

写者あとがき・2024年10月31日

１、松山幸生先生のこの講述は「1958年から40年以上つきあってきた仲間との学びのために、ある程度の相互理解の上に立って展開された」ものです。従って所々で暗黙の了解があり、初めての読者には解説が必要になります。松山先生の教えを直接受けられた森容子先生に監修をしていただき括弧をつけて文章の補完をして頂いております。

２、松山先生の比喩は聖書の本文を理解する上でとても工夫されおります。今回の「押し流される」を航海用語を用いて「押し流される」意味を非常に深く説明されています。押し流す力は強く、常に目的地に向かって目を覚ましていなければならないことがよく分かります。「ヘブライ人への手紙」は書簡というよりも、現代にも生きる説教となっているように思われます。

３、原典からの説き明かしも豊かにあり、「語られました」（ラレオー）は「主、語りたもう、我は聴くなり」の応答関係にある言葉であること等日本語にない深い意味が込められていることも学ぶことができました。「押し流される」は（パラレッツオー）も単に押

し流されるのではなく、勧告、警告を含む意味が込められていることも説き明かされており、御言葉の真意を学ぶことができました。

４、今回は旧約聖書と新約聖書を「律法と福音」また「天使と御子」の両者の特徴をクローズアップさせて、その比較の過程で「何が正統的な信仰であるのか、何が主を蔑(なみ)することであるのか」を明らかにして「大きな救いなる福音」に無頓着であっては、罰から決して逃れられないことも大胆に（普通あまり論じられていないことにも言及）説き明かされていると感じました。森容子先生の説教はヨハネによる福音書を引証されて更に詳しく伝えてくださっています。

５、松山先生がよく用いられる「イエスのよる救い」については「相互理解の上で」説明する必要もないことだと思いましたが、「主の救い」の意味についてしっかりと学びたいと思い森容子先生と何度か書簡の交換をし教えを乞いました。短文で定義することはできませんが次のようにまとめました。

１）最期の審判において断罪の裁きを受ける罪人の定めが、主イエスの十字架による
　　贖いを信じることにより、救われる復活の希望により、死後の不安が取り除かれた「心の救い」永遠の命に与ること）

２）イエス様の御心によって選ばれ、受洗によってキリスト者とされたことで、天の「命の書」に名が記されたことにより得られる「契約の救い」

３）内在のキリストの霊（インマヌエルなる聖霊）により、「自我に死に、キリストに生きる（自分の十字架を背負う）」道に導かれ、罪の自覚と罪の制御を頂いている「霊的救い」

ひとりで写書していては決して気づくことも、問うこともないことに対話を通じて、このように基本的に大切なことを思い起こしてくださることに感謝しております。

最後に今回頂いた励ましの言葉を味わいたいと思います。

「現実にイエスに心を向けている者には、主御自身が積極的に近づいて出会ってくださる。それは過去においてどうだったかではなく、いつでも「今」があなたの救いの時なのだ、ということを明確にされるためです。」

「

2024年10月31日（宗教改革記念日に思うこと）